
東方幻想異端

オワタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想異端

【Nコード】

N10850

【作者名】

オワタ

【あらすじ】

あらすじ 夏休み、実家に帰省した。そこで妙な事件が起こった、そしてその事件で妙で胡散臭い妖怪賢者と出会い。少年の人生は変わってしまった。

ブログ的な何か（前書き）

東方Projectの二次創作のオリ主ものです。
独自設定・解釈はありますが、
それでも、大丈夫。OKの人はどうぞ。
苦手な方にはオススメできません。

ブローグ的な何か

現代、博麗神社。

その土地に住む人でも、その場所を知る人は少ない。

山の中にあるので、ほとんどの人が来ることが無いので最低限の手入れしかされていない。

この土地の管理者が半年に一度ほどの割合で雑草を抜いたり、清掃にくるのだ。

ちょうど、その時期と重なり博麗神社は綺麗になっていた。

鳥居は何度も塗装した跡が見られるし、本堂の修繕箇所も数え切れないほどある。

あえて言うなら、修繕も塗装もしていないのは賽銭箱だけである。

そんな神社に1人の客が来ていた。

この土地の管理者の孫にあたる、少年。

たかはし
ともかず
高橋 智和である。

「久々に来たな」

のんきな声で言う。

彼は中学校から全寮制の学校に入っていた。

ちなみに野球部に所属していたので、長期休暇もほとんど帰れなかったし。

ゴールデンウィークなどの連休も部活動で帰省できなかった。

なので、彼は小学生卒業以来この場所には来ていないのである。

賽銭箱に5円玉を投げ入れる。

「神様ね……………本当にいるなら、この腕を治してくれないかな……………」

智和の学校はエスカレーター式なので、高校に上がっても野球を続けるつもりでいた。

だが、今年の1月の事である。

帰省した時に、この神社に向かおうとしていた時に運悪く地震が起ったのだ。

雪のほとんどが溶けていた事もあり、土砂崩れを起こしたのだ。土砂崩れには巻き込まれなかったのだが、倒れてきた木に右腕を押し潰されてしまったのだ。

木の枝のいくつかも彼の腕に突き刺さった。

医者に、

「リハビリをすれば、日常復帰もできるだろう。

しかし、残念だがもう野球どころか腕を使うスポーツはできない
と思ってくれ……………」

そう言われた。

だが、半年かかるはずのリハビリを僅か1ヶ月で終えたのだ。

そして、今までのように彼は野球を続けようとしたが無理だった。

左腕で野球を続けようと、考え努力するも思っよう上手くいかずに
仲間に迷惑をかけた。

これ以上は迷惑をかけまい、と彼は野球部を退部したのだ。

「いかにいかに、またネガティブになる事を考えるとところだった」

世界には、漫画のような展開は滅多にないのだ。

利き腕が潰れたなら諦めるしかないのだ。

「そー言えば、爺さんが言ってたな。この神社は、違う世界の博麗
神社に繋がっているって」

子供の頃に信じていた記憶がある。

「実際は…………あるわけ無いのにな」

爺さんから聞いた話。

賽銭箱に小銭を投げ入れると、その小銭が消えてしまうのだ。

ビデオカメラを入れてどうなっているのか、と調べようとしたが結
局そのビデオカメラも消えた。

なので、この神社はどこかに通じているのかも。

そう考えた奴がうちのご先祖様にいたようで、今はそんな感じに語

られている。

懐かしい思い出に浸っていると不意に携帯電話がなった。

従兄弟や叔父、伯父、叔母、伯母も帰ってきたらしく、オレも帰って来いという事だ。

やれやれ、そう思いながら博麗神社の階段を下る。

その時、1人の女性とすれ違った。

金髪で日傘を差して、どこかお嬢様っぽい感じの女性だった。

「こんにちは」

「あ、はい。こんにちは」

不意にあいさつをされ、遅れてあいさつをしてしまった。

女性はにっこりと笑って、博麗神社に向かっていった。

誰だったんだろう・・・・・・？

爺さん関係の人か？

1 始まり（前書き）

連載を出そうとして、ミスって短編の方があると思いますが無視してください。

本当に迷惑をかけてすみませうデシタ。

1 始まり

山を降りて、家に向かう。

ここは、田舎で名所はなく。

川も綺麗で、山もまったく伐採されていない。

近くに大きな街があり、ほとんどの人はそこで買い物をする。
徒歩20分くらい。

しかし、学校はないので。

こっちの小学校に通う他ないのだ。

小学校は全児童、500人ほど。

中学校だと300人ほど。

中学に上がると、オレみたいに向こうに行く奴がほとんどだ。
だが、女子は別である。

数十年ほど前から大規模の女学院が田舎の片隅にあり。
今でも結構な人数がいるらしい。

「あ、兄さんだ」

「ん？有希か……」

こいつは、妹である。

さっきも言った通りに女子は、大学もこの地元にあるので妹達はこの田舎から出る気はないらしい。

「帰りか？」

「そーだよ。夏休みの補充授業は午前中だけだからね」
能天気で馬鹿っぽい奴である。

「亜希と美希は？」

「あの2人は、頭良いからね。家にいるんじゃないの？」

「会わなかったぞ。むしろ、お前だけが馬鹿なんだろ」

「そんな事ないよ！」

顔を真っ赤にして怒る、中学生になっても五月蠅い妹だ。

うちの家族構成には興味はないだろうから、適当にとばしてくれ。
爺さんの子供は、5人いるんだ。

ちなみに長男がオレの父さん。

長女、次女、三男＋三女の双子。

なので、うちの父さんがここに住んで爺さんの世話をしたり土地の管理をしている。

オレの兄弟は、長男、長女、次男、三男^{オレ}である。

父さんの妹、長女の人が十年前に無くなってから、長女さんの娘3人を父さんが引き取った。

彼女らが当時2歳、3歳、4歳の頃の話である。

亜希が長女で、有希が次女、美希が三女だ。

引き取った理由は、金銭的に余裕がある。とオレの母と姉が世話好きだからってのもある。

一番上の兄貴が、医者。次男の兄貴が、教師（仮）。姉貴が保育士である。

ちなみに全員がオレより6以上の年が離れている。

夏休みと冬休みには母さんの兄弟姉妹も遊びに来るので、かなりの規模になる。

家は半分和風、半分洋風で豪邸か屋敷かなんと言って良いか分からない感じである。

何でも、一番上の兄貴が生まれた記念に家を改築したらしい。

家に戻ると宴会が既に始まっていた。

兄弟どころか、叔父、伯父、叔母、伯母、従兄弟とほとんどが酒を飲んでいた。

まだ、7時前だぞ？

酔っ払いに絡まれるのが嫌なので、早急に自分の部屋へ向かう。

こつちに帰る時に一緒に持って帰った携帯ゲーム機でモンスターハントのゲームを始める事にした。

そうして、居れば同年代くらいの従兄弟達も遊びに来て騒がしくなっていく訳で。

何だかんだで、騒ぎ、遊び、最終的には全員が体力切れになるわけ。

オレ以外の全員が寝てしまった。

ちなみにオレの部屋は占拠されたので今夜の寝床も探さなくてはならない。

歩き回っていると、爺さんの部屋の前にたどり着いた。

まだ、灯りがついていて、音が聞こえる。

「爺さん、何やってるんだ？」

「ん？おお、智和か。いや、何。倉庫の鍵を無くしてな」

「倉庫………？ ああ、あの倉庫か」

うちには、新しい倉庫と古臭い倉庫がある。

新しい倉庫は、オレやオレの兄貴達が小さい頃に遊んだおもちゃが入ってるらしい。

古臭い倉庫は………ボロイ以外の印象がない。

新しい方の鍵は玄関にかけてあったはず。

「ぬ？おお、あったあった」

横に長い箱の中に一緒に入っていた。

元々、箱に入っていたものは………見なければ良かった。

ゾンビゲームお馴染みのアレでした。

「爺さん、それ………」

「うむ？ 懐かしいの？」

「もしかして、爺さんの？」

「そうじゃ。昔、話した気がするんじゃないが………」

「いや、記憶にない」

「そうか。ならもう一度聞かせてやろう」

「いや、だから聞いた事が………」

爺さんの話は1時間ほどの話だ。

若い頃、爺さんは何処とも知れぬ奇妙な世界に飛ばされたそうだった。その世界では『弾幕』と言う、攻撃方法を用いて戦うらしい。妖怪に襲われるも、爺さんの愛銃で撃退したらしいのだ。

元の世界に戻るために爺さんは、その世界を回ったそうだった。時には、最速を名乗る天狗、自称最強の妖精、夜の間だけ目を見えなくする妖怪。

吸血鬼や未熟な剣士、自称閻魔の少女、向日葵の畑に住む女性と戦い元の世界に戻る手段を探した。

銃は1度壊れたらしいのだが、森に住む半妖の青年が修理してくれたらしい。

そして、その青年から太刀と小太刀を拵えてもらったそうだった。

ちなみに太刀と小太刀は無くしたらしい。

最終的には八雲と言う、女性が元の世界に戻してくれた。

今一、信じ難い話である。

「いいんじゃないよ。自分だけでも、真実を知っているのだからな」

その時、ほんの一瞬だけ爺さんが別人に見えた気がした。

「それじゃ、倉庫の中を漁るとするか。ほれ！孫、お前も手伝わんかい！」

「へいへい」

面倒だが、オレも倉庫の中身が気になったので行くことにした。

さっきの爺さんの言った、妖怪とか弾幕とか訳の分からない世界に行ってみた。

そう、思った。

けれど、そんな事を思うほど……オレは生きていくのが嫌になったのだろうか……？

同時刻 現代 博麗神社

花火のような色鮮やかな閃光や弾丸が神社を照らしていた。

「くっ！」

「妖怪賢者、恐ルル二足ラズ！」

細い人影が2つ、閃光や弾丸を用いて戦っていた。

妖怪賢者と呼ばれた方は息が上がっていき。

もう片方に隙を突かれ地面に叩きつけられた。

「では、その力。貰おう！」

「・・・・・・っ！」

妖怪賢者と呼ばれた方は、腹を爪で貫かれ、頭を掴まれる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ！」

声にならない叫び響いた。

その後、妖怪賢者は無造作に地面に叩きつけられた。

「マダ、生キてイるノか・・・・・・？」

言葉通り虫の息だった。

殺さなくても勝手に死ぬと判断したのか、もう片方は去っていった。

「・・・・・・は、あ。・・・・あ、あ・・・・あ・・・・

・・・・」

視界は揺らいで、虫の声すらもはつきりと聞こえなくなっていった。

そして、妖怪賢者は気を失った。

1 始まり（後書き）

グダグダでスミマセン。

文才はないと自分で思いますが、お付き合いいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1085o/>

東方幻想異端

2010年10月8日21時41分発行